

★ 特集：漆喰の文化と新たな価値の創造 ★

# 日本の“やわらかい”漆喰が生み出す美

早稲田大学理工学術院 准教授  
山田 宮土理

## 漆喰のある町に住む

私事であるが、昨年、埼玉県のとある町に引っ越した。しばらく単身赴任をしていた夫がぎりぎり同居可能な場所で働けることになり、互いに長時間通勤を覚悟で引っ越すことにした。ほんとうは、通勤時間を第一優先に考えればもっと合理的な場所があったのだが、この町は魅力的で住みたいと思った。色々な魅力があるのだが、「蔵のある町がいいよね」という夫の一言には、大いに賛同したのであった。確かにこの町には蔵がたくさんある。石蔵と土蔵があって、一番多いのはやはり白く光る漆喰でまると包み込まれた土蔵である。今年の7月に二人目の子供を出産したが、蔵があることで思いがけず助けられている。幼い子供が泣き止まないとき、抱っこやベビーカーで近隣を散歩するのだが、ここにこんな蔵があったか、この蔵にはこんな装飾があったか、などと新しい発見を楽しんでいるうちに、子供はぐっすり眠りについている。蔵好きな私ならではの楽しみ方も知れないが、蔵のつくられた場所、残された場所に感じる脈々と繋がる時の流れや、地に足の着いた安堵感には共感して頂ける方もいるのではないだろうか。

この町に住む以前には、奈良県に住んでいた。ご縁があって重要伝統的建造物群保存地区である今井町(写真1)に住んでいたのも、まちなみを構成する材料は、格子や板張りの木材と、壁やむしこ窓の漆喰、そして屋根瓦が大半を占めていた。町で工事があれば当然のように土壁塗りや漆喰塗りを目にするのができ(写真2)、思い返すと今井町での生活はタイムスリップしたような特殊な日常であった。ちょうど一人目の子供を出産して間もなくの頃に今井町に住んでいたのも、ここでもまた歩いて楽しい町に幾度となく救われた。

長い時間軸のある建築やまちなみに共通して、木、土、石



写真1 今井町のまちなみ



写真2 今井町で見かけた漆喰塗りの様子